

東北芸術工科大学 デザイン工学部

# 建築・環境デザイン学科 年報2009

Tohoku University of Art and Design

Department of Architecture and Environmental Design, Annual 2009



人間、社会、自然の関係を結び直すデザイン



TOHOKU UNIVERSITY  
OF ART & DESIGN



## はじめに

---

東北芸術工科大学建築・環境デザイン学科は、各年度における活動の記録と報告を目的として年報を発刊します。これは、当学科が教育理念として探求する「人間、社会、自然の関係を結び直すデザイン」を広報する活動の一環でもあります。

年報は、教育報と研究報の二章から成ります。教育報には、各年度の教育における成果をまとめます。また、研究報には実習や実作、研究会、講演会、卒業研究秀作その他の概要を掲載します。

私たちの学科は、本学が立地する山形、東北という、自然の性質に則して人間が健やかに生きる方法を学ぶのに適する教育フィールドの可能性を、最大限に生かそうと努めています。そして、読者の皆様には私たちの教育、研究とともに、背景にある山形、東北の魅力をお伝えできるような編集を心がけて参りたいと考えています。

私たちの1年は、雪が解けて大地が太陽の光をじかに受けられるようになり、水が温み、田や畑の畔のホトケノザ（仏の座 *Lamium amplexicaule*）やカキドオシ（垣通し *Glechoma hederacea*）が小さな花をつける春からはじまります。少し遅れて桜桃が花を咲かせ、田には稲の苗が植えられ、じきに黒々としたオタマジャクシの群れが水の中を泳ぎまわるようになります。この頃、本学からほんの少し歩いたところにある戸神山の南麓はヤマブキ（山吹 *Kerria japonica*）の花に包まれます。やがて、桜桃の赤い実と少し黄みがかかった緑の葉のコントラストも鮮やかな季節が訪れ、近郷の人々はサクランボの収穫に湧きます。そして暑く、短い、夏が来ます。夏の日中の熱さは相当なものです。朝夕は涼しく、特に山麓で日常を過ごす私たちにとって、少しずつ気温が下がってゆくなかで夕焼け時の西の空の美しさを体験する心地よさは格別です。

暑い夏は、ある日秋に変わります。人々は河原で芋煮会を開き、澄んだ青空の下での食事と親睦を楽しみます。田では稲が黄金色の穂を実らせて、刈り取りの季節を迎えます。ほどなく山は木々の葉のはっきりとした紅と黄に彩られます。それから、底冷えのする寒さが訪れ、乾いた空気にモズ (*Lanius bucephalus*) が鋭く鳴く声が響く晩秋へと至り、そして雪が降ると人々は「冬が来た。」と言い合います。冬の空気は冷たく、しかし雪の上ではほのかに湿気もはらみ、何か「凜として」感じられます。

こうした細やかに変化する時候の一つ一つを、山形では「節」と呼びます。私たちは、いくつもの節の移ろいのなかで教育と研究に取り組んでいます。

## 追記

2011年3月11日14:46に東日本大震災が発生しました。本報の編集にあたっている3月27日現在、地震と津波により起きた福島第一原子力発電所の事故は収束を迎えられていません。被災者の捜索も続けられています。

被災者支援、被災地復旧、復興を、私たちは長い年月をかけて担う必要が生じました。「人間、社会、自然の関係を結び直すデザイン」の意義と可能性が、これから厳しい現実の中で試されてゆくことになります。

希望を忘れずに、私たちは東北の人々とこの大きな仕事に臨みます。





羽黒神社参道から見晴るかす最上川すじの田園地帯、白鷹町山口地区



## 目次

---

---

教育報	6
<hr/>	
1年生 建築・環境施工演習	7
<hr/>	
2年生 タウンハウスの設計	8
<hr/>	
3年生 建築ランドスケイプ共同設計	9
<hr/>	
研究報	10
<hr/>	
ヘルマン カウフマン講演会	11
<hr/>	
マエキタミヤコ講演会	11
<hr/>	
エコハウスのこれまでとこれから	12
<hr/>	
卒業研究 生物相パズル	14
<hr/>	
卒業研究 大江の過疎集落における研究	16
<hr/>	
卒業研究 淡い画	17
<hr/>	
学科VI計画	18

# 教育報

今年度の教育における成果

---

本年度から新カリキュラムが始まった。対象となるのは1年生であるが、2年生以上の演習課題にも変更した部分がある。新カリキュラムでは、1、2年生は全員が同じ演習を履修するが、3年次から建築設計演習か環境計画演習のどちらかを選択することになる。

1年生は身の回りの事柄の大きさの把握、測量、製図やCAD、空間記述などの技法を修得し、また施工体験を通じて自然と向き合う姿勢を養う。2年生は製図ペンを使ってのトレースやインテリア設計などの課題に始まり、フィールドワークの実際を経験し、後期には木造住宅の設計、タウンハウスの設計や都市の基本構想など、順次スケールの大きな課題が与えられた。3年生は、建築系では様々なビルディングタイプの設計を実践的に行ってポートフォリオを作成し、環境計画系では農村やニュータウン等の異なる対象を取り上げ、最終課題では各自の興味や得意とする対象を定めるべく、両分野を統合した共通課題が出題された。

## ヘルマン カウフマン 講演会



カウフマン氏（左）とシッフार्ट氏（右）

Hermann Kaufmann（ヘルマン カウフマン）氏はスイスのフォアールベルグ地方で優れたデザインの木造建築を設計されてきた建築家である。2009年の3月、春になる前にその地方を訪れた時、その端正な空間、木の材質感、時とともに変化することなどを見て感動し、ぜひお話を伺ってみたいと思っていた。それが日本で実現したのが今回の講演会である。同氏がどのように、気候や材料を考えながら、風土にあう建築を作ってきたか、その試行錯誤が時代を追って紹介された。最初はさまざまな技術的な試みが、だんだんと空間的造形的に洗練されてゆく。また、オーストリアの木材産業やエネルギー政策、地域の活性化は、同じように森林を多く擁する日本（日本の森林面積は国土の67%を占める）にとって、多くの示唆があった。また、一貫して木造という方法の価値を高めようとしていること、工法や流通、生産などの工夫への絶え間ない挑戦など、カウフマン氏の建築家としての姿勢、態度にも多くを学ぶことができた。何より美しい空間は人を感動させる。身近な木材も使い方次第である。

また、通訳のシッフार्ट氏がアーヘン工科大学都市建築学科修了のキャリアを生かし、十分な準備と工夫をして仕事に臨まれたこともあって、講師と聴衆の一体感が印象的な講演会となった。

### ヘルマン カウフマン

大工の家系として1955年オーストリアのフォアールベルクに生まれ、インスブルック工科大学、ウィーン工科大学にて建築を学ぶ。1983年にChristian Lenz（クリスチャン レンツ）とともに共同オフィスを設立。1986年から1993年までHelmut Dietrich（ヘルムート ディートリッヒ）が共同オフィスに加わる。2002年よりミュンヘン工科大学木造建築学科教授。2007年「Global Award for sustainable architecture」受賞。

## マエキタミヤコ 講演会

マエキタ氏の活動は多岐にわたっている。生物多様性、環境保全、住民参加、平和、食の安全など。そのすべてに広告のコピーや伝え方を工夫して、いろいろな今ある世の中の仕組みをよくしようとしている。最初はなぜそんなに領域が広いのか理解できなかったが、ある時、同氏の視点は「我が子にこの社会をどうやって渡すか。」ということに尽きると気がついた、なるほど。

マエキタ氏にとって一番興味があるのは、目下のところ「住民参加」である。自分たちがどうしたいか、それをどうすれば伝わるか。どう考えるか。自分たちで考え、自分たちで決める。そしてそれに責任を持つ。民主主義の根幹であるこのことは、非常に重要なことだが、それを勝ち取ったという意識がない日本人にとってはもっとも理解されにくいことでもある。では、何もしないで手をこまねているのでよいかと言われるとそれはちがう。話し合っ、ある答えを見つける。人口減少社会における地域の特殊解を見つける方法にはこの住民参加しかなく、その具体的な方法を垣間見せてくれた講演であった。



講演後に学生からの取材を受けるマエキタ氏

### マエキタミヤコ

1963年東京生まれ。環境NGOのための広告メディアクリエイティブ[サステナ]代表。クリエイティブディレクター、コピーライター。1994年よりNGOの広告に取り組む。女性のためのエコライフスタイル誌「エココロ」編集主幹。「100万人のキャンドルナイト」よびかけ人代表。「ほっとけない世界のまずしさ」2005キャンペーン実行委員。主著『エコシフト』（講談社現代新書）、『でんきを消して、スローな夜を』（監修/マキノ出版）。

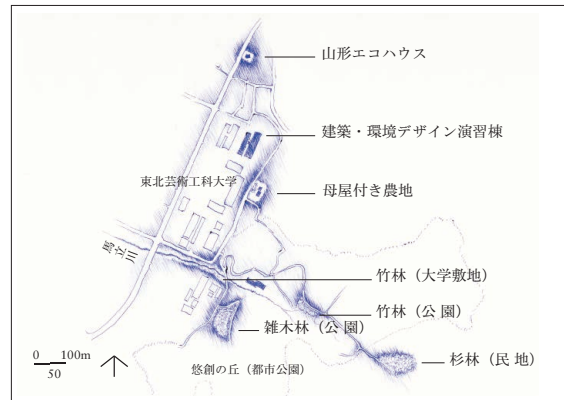


## 建築・環境施工演習

建築・環境施工演習は実地型演習であり、いわゆる現場がある。大学裏手の母屋付き農地は、当学科2年生の演習「フィールドワーク入門」で調査法を学ぶ場所だが、1年生の作業現場でもある。その奥には県立の都市公園が隣接するが、一角の雑木林を演習で管理している。さらに公園の奥へ抜けると杉の人工林がモザイク状に現れる。この森も許可を得て演習で間伐している。これら全てが西蔵王の緩やかな斜面の上に展開している。この斜面で集められた水が川となり大学の敷地を貫流しているが、河畔には竹が繁茂している。竹林から施工に用いる材料を得つつ空間を整理する作業も行っている。このように大学敷地とその周辺に演習フィールドが見出されているが、もう一つ“山形エコハウス”がここに加わる。その庭が施工の現場となっている。

演習としてこれらの現場では、草刈りや枝打ち、間伐、破碎等の管理作業、またそこから発生した材を用いて垣根、そだ粗朶柵、エコスタック（生態的な小動物の生息空間）等の構造物の制作、現地採取の石を用いた石積みや石の敷並べ、植物の移植などを行っている。

身近な自然環境に触れ、どのように関わりあえるかについての知識と想像力を養うことや、素材に触れ、それを材料として実際に構造物の施工を行うことで、物理的な材料の施工性を知ることが演習の目的としている。これらを通じて建築設計や環境デザインにおける真の創造力を養うことを狙っている。



大学敷地（山形市上桜田）とその周辺



山形エコハウスの庭に施工した粗朶編み柵（左）と石敷きの暗渠（右）



### 自然にふれる

雑木林の枝をはらって光を入れ、人が使う場所に整備しながらも、多くの生きもののための生息空間をつくる。



### 柱を立てる、竹を組む

間伐材を利用して先ず支柱を立てる。竹林を整理して得た竹を組む。実際に材料を組むことで力のかかり方を体感する。



### 粗朶を編む

間伐した森から得た枝で粗朶を編む。木の持つ“しなり”や材料の間隔を感じながら、考えながら施工する。



### 石を積む

現地で得た石を“おもみ”を体感しながら積み上げる。わずかな接点を確かめながら重心を見抜いて石をバランスさせる。

## 4軒のタウンハウス（住宅群）と小さな店舗の設計

対象敷地は山形市外の中心、七日町の大通りから一本入った駐車場。この場所に「4軒のタウンハウス（住宅群）と小さな店舗」を設計するのが課題だった。期待したのは、商業地のなかに住居があることの可能性を示して欲しいこと。近代において細分化されてしまった住空間と商業を再び統合することによって、市街地に再び楽しく、活気のある空気をつくる工夫を、この設計を通して思考して欲しかった。ポイントとなったのは、まず住空間と店舗の関係性のデザイン。離すか、融合させるのか？ また街に対して開くのか、閉じるのか？ その総合的な判断によって建物の配置も平面も大きく変わってくる。さらに駐車場や庭への言及。建物が建たない部分のデザインが敷地全体の雰囲気を決定づける。

結果的に多くの学生たちが選択したのは、「住」と「商」が入り組んだ、ヒダのような空間だった。お互いが見え隠れしながら、働き、商う風景と、食べたりくつろいだりする家族の風景がモザイク状に混在する。そこには彼らが欲する街の姿が表現されているようにも見えた。

働住分離が押し進められた戦後日本。しかし、それが中心市街地の空洞化を招いている。街には再び人が住み、商う。両方の行為が渾然と一体となった状態に新しい可能性を見る、若い世代の感性が現れていた。街は、この世代に新たなプログラムを任せていくべきだと思った。



敷地周辺。七日町一番街商店街界限



対象敷地（山形市七日町）とその周辺



優秀作品

キヨリが紡ぐ場所 石原由梨

タウンハウスを七日町商店街という海に浮かぶ一つの島として考え、この島を形成する要素である「七日町」「タウンハウス」「住宅」「店舗」の掛け合わせに、心理的に感じる関係性のキヨリを持たせた。例えば、壁を交差させることで全体を繋ぎとめながらも、間に中庭や駐車場を入れることで住宅同士のプライベートを守る。島を2層に分けることで、1層目は住宅や店舗が独立して機能するが、2層目は境界線が緩むので町にオープンになる。

様々な要素が含まれる一つのまとまりだからこそ、多様な関係性を持つ豊かな島であってほしい。



建築・ランドスケープ共同設計

3年次最後の演習として、地域環境の性質に適った土地利用方法（建築設計、ランドスケープデザイン、地域計画は、その諸形態と考える）を立案する課程をもうけている。演習地は本学近隣の千歳山公園で、排水設備や休憩の設えその他に不備があり活発に利用されているとはいえない現状にある。

同公園は山形市街を見下ろす千歳山（海拔471m）の南西麓に位置し、地形は東から西にかけて傾斜（下降）している。周囲には寺社が数多く建ち、信仰の拠点と目せる場所性を有する。公園の上部（東側）は千歳山登山口に面し、山を覆うアカマツ林が下りてきている。下部（西側）は住宅地に接し、桜の古樹が植えられる。また、千歳山南麓の平清水集落は古来窯場の集まる陶里として知られ、都市計画法の風致地区に定められて緑濃い屋敷町の趣を醸す。一方、地区を西流する恥川のコンクリート護岸築造など、場所性の遺失も進んでいる。

こうした場所性とその根底にある土地、地区、地域の成り立ちを理解し、加えて提案対象地と周辺に内在する課題を見つけ、場所性の保持、修復、そして進展への寄与を図りつつ課題解決を図ることを本演習の目標とする。なお、演習地と周辺の季節変化を知るために学生は毎月の定点観察を行っている。

提案は建築設計、ランドスケープデザイン、地域計画のいずれとして作成してもよい。また、それぞれを志向する学生の協働を奨励し、このことから演習名に「共同設計」の語を付した。



千歳山公園（手前）と千歳山（奥）



千歳山公園（山形市大字平清水）とその周辺

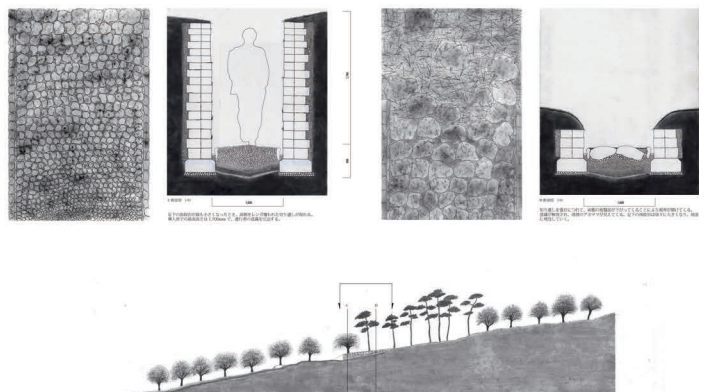
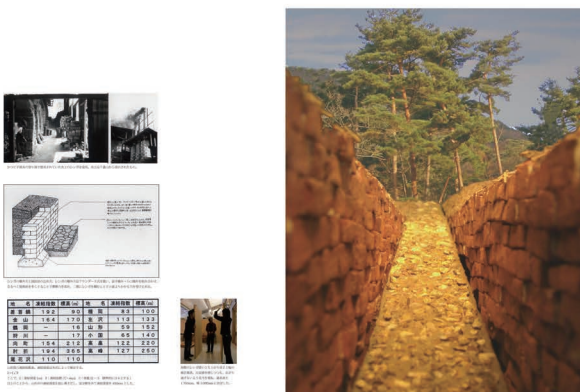
優秀作品

意識の昇る公園を目指して 野呂光平 工藤裕太

対象地一帯は縄文時代より「端山信仰」の舞台となった。死者の霊が公園の背後に控える千歳山へと昇り、子孫を見守るといふもの。それ故、千歳山は人々にとって特別な意味を持ってきた。

ところが現在はそのような場所性が、宅地化や国道開発によって薄れつつある。そこで、人々に千歳山への意識を想起させる公園を、大地を構成する流紋岩の「みち」によって構想した。染井吉野の

下を潜るみち。平清水焼の窯に使われていた赤レンガによる切り通しのみち。千歳山の植生を構成する赤松の下を潜るみち。人々はゆっくりと歩みを進めながら、気がつけば千歳山の中へ入り込んでいる。





# 研究報

実習や講演会、卒業研究の秀作などの概要

---

本来、建物やその他の居住環境等は、そこに住まう人々にとって重要な役割を負う。しかし、多くのそうした空間は、よく考えられないままおざなりにつくられている。そうではなくて、人間が生活し活動する空間をどうつくるか、デザインに何が可能かをよく考えて実行することが建築その他の居住環境の計画であり設計であるはずだ。

建築、環境デザインに何が必要なのは感性だけではない。人間を取り巻く環境や社会やデザインが今に至るまでの歴史であったり、建物や庭や道や広場のつくりについての知識であったり、同時代のデザイナーの多様な思考それぞれに対する解釈なども必要である。そのなかで、自身の行動規範と技術の確度を高めながら活動してゆかなければならない。

各研究室では、はじめに基礎的な思考方法や技術の補強を行い、その上でゼミ活動や卒業研究などの応用段階へ進む。また、実社会で望まれている空間を、学生有志が計画、設計、施工することもある。そこでは、計画や設計の実務において求められるのと同等のスキルが要る。こうした実践もまた、当学科の研究における重要な活動の一つである。

## エコハウスのこれまでとこれから



### 山形エコハウスとは

山形エコハウスは、環境省による「21世紀環境共生型モデル住宅整備事業」を実施する全国の20の自治体のひとつとして、山形県が事業主体となって2009年に建設された。建築・環境デザイン学科の学生が基本的な建物の設計を担当。それを引き継いで山形市内の建築設計事務所が実施設計と施工監理を行い、教授陣がアドバイザーとして専門的な知識を提供した。

山形エコハウスは大学を中心とした地域密着型のプロジェクトチームにより生み出され、低炭素社会における住宅の未来形とはどのようなものか、実際の住宅としてその具体的な姿を提示している。

### CO<sub>2</sub>を排出しない住宅を目指して

建築・環境デザイン学科では継続的にエコハウスの研究を進め、2009年8月にそれを一冊の本『未来の住宅/カーボンニュートラルハウスの教科書』にまとめた。本をまとめる過程で整理されたCO<sub>2</sub>を排出しない住宅のための条件は、木で家をつくること、住宅を省エネルギー化すること、自然エネルギーを使うこと、の3つである。その3つの条件をもとに山形エコハウスを設計した。

世界では、2008年に行われた洞爺湖サミットにおいて



『未来の住宅/カーボンニュートラルハウスの教科書』

「2050年までにCO<sub>2</sub>排出量を全世界で50%削減する」という目標が掲げられた。その目標を達成するために先進国は、国あたり80%のCO<sub>2</sub>を削減しなければならないと言われている。そのことから考えて、建築分野におけるCO<sub>2</sub>の大幅な削減は不可欠であり、他の先進国ではすでに低炭素社会に向けた新たな政策や法律がつけられている。日本は、大きく遅れをとっているのが現状である。山形エコハウスは、建築分野のCO<sub>2</sub>削減の考え方をわかりやすく形にし、未来の住宅を考えるためのモデルになることを目指した。

### 地球にやさしい、快適なエコハウス

2010年の夏は記録的な猛暑が続き、山形でも夏日が続いた。それでもエアコンを1台稼働させるだけで、50坪の居住スペー

スを快適な温度に保ことができた。しっかりと断熱や気密の性能を上げることで、冬の暖かさだけでなく夏の涼しさを得ることができる。エアコンに使う電気は、太陽光発電によってまかなわれ、消費量を発電量が上回る結果となった。一方冬は、木のおが粉や間伐材を熱で圧縮して固めた「ペレット」を燃料としたボイラで温水をつくり、家全体を暖房している。ペレット袋半分（約200円）で、日中の室内の温度を20°Cに保ことができた。また真冬日の夜に暖房を切っても、翌日の朝の室温が約15°Cまでしか下がらないことが分かった。

建物の性能を上げることや自然エネルギーを活用することは地球環境にやさしいだけでなく、住む人にとっても快適な環境を提供してくれる。本当のエコハウスとは、地球とわたしたちの両方にとってやさしい住宅なのである。

#### 山形エコハウス、2年目の試み

2010年は、山形エコハウスの存在を各方面へ広報するとともに、実際に建物を見てもらいながら案内することを通じて、建物の作られ方や省エネ住宅の必要性について普及啓発する活動をおこなった。山形エコハウスの特徴でもある厚い断熱材が使われた壁の断面サンプル、トリプルガラスで気密性能の高いサッシのサンプル、省エネに関する書籍などを展示するとともに、運営を通して感じられた快適性やそのときの温湿度の状況を見学案内やウェブサイトにて情報提供してきた。

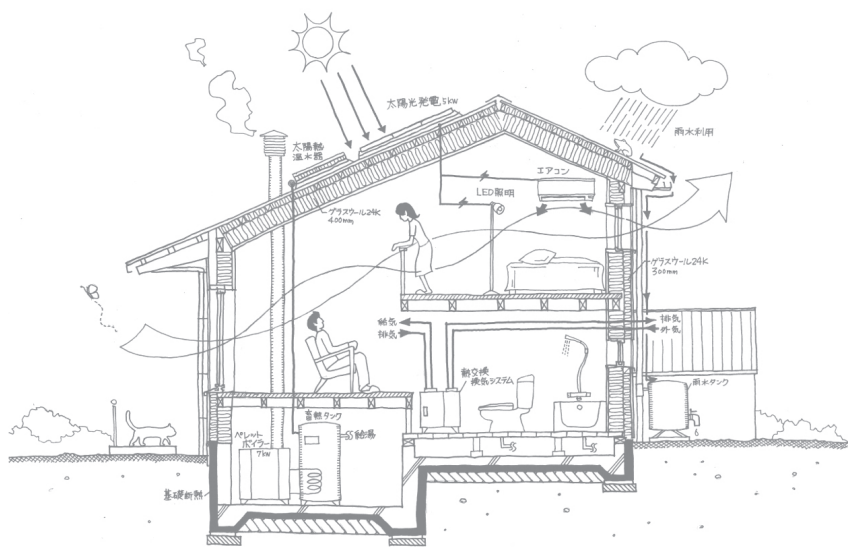
2011年は、建築や住宅に興味のある人だけでなく、より多くの人々に地球環境の現状やこれからの住宅の姿を発信したいと考えている。昨年度はムジ・ネット株式会社と「未来の家プ



地元産材をふんだんに利用した内装

プロジェクト」を産学協同でスタートした。大きな転換期にある日本の住宅とその暮らし方について、これまでの木造住宅とは次元の違う物理的性能、デザイン、暮らし方の考察、研究開発を進めている。また、山形エコハウスをベースにしなが、すでに宮城県の蔵王に新たなエコハウスが建設され、現在は山形市内に別の普及モデルを設計している。学生も関わりながらプロジェクトを進めており、低炭素社会における未来の住宅を担う未来の人材を育てるため、より専門的で実践的な教育を展開している。

夏暑く冬寒い山形は、はっきりとした四季によって様々な環境を提供してくれる場所である。山形エコハウスはこれからも、厳しく魅力的な山形の土地で地球環境を学生とともに考え、未来の住宅の創造を続けてゆく。



図解：山形エコハウス

山形エコハウスへの問い合わせ

見学時間

平日・土曜日 10:00~16:00

山形エコハウスのホームページ  
<http://www.tuad.ac.jp/ecohouse/>

学生&職員によるブログ  
<http://ecocohouse.exblog.jp/>

山形エコハウスのつぶやき  
<http://twitter.com/YMGTEcohouse>

990-2421 山形県山形市上桜田 3-2-37

Telephone 023-673-9518

Fax 023-673-9519

E-mail [ecohouse.yamagata@gmail.com](mailto:ecohouse.yamagata@gmail.com)



① 甲箭神社の風景 (絵地図の検討)

神社の主な生息生物



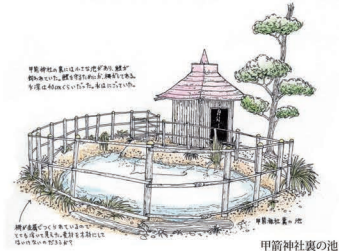
スズメ



ハシボソガラス



ツバメ



甲箭神社裏の池

池の主な生息生物



アメンボ



ゲンゴロウナ



コイ

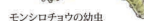
畑の主な生息生物



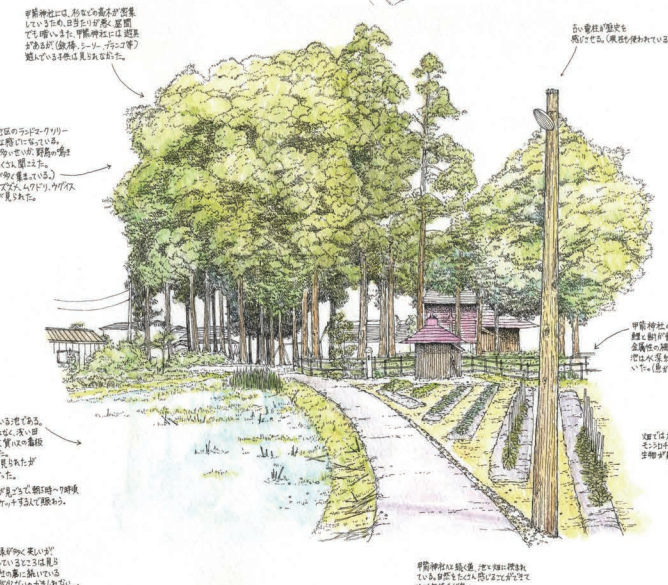
モンシロチョウ



キアゲハ

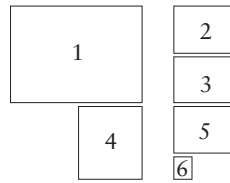
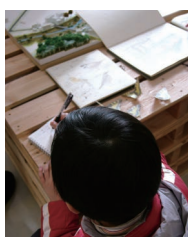
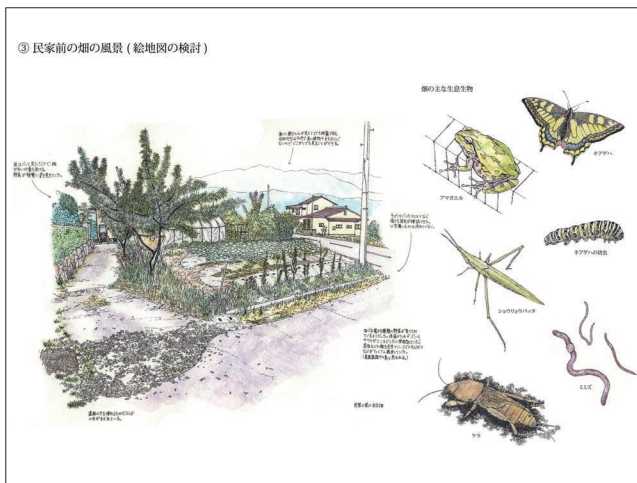
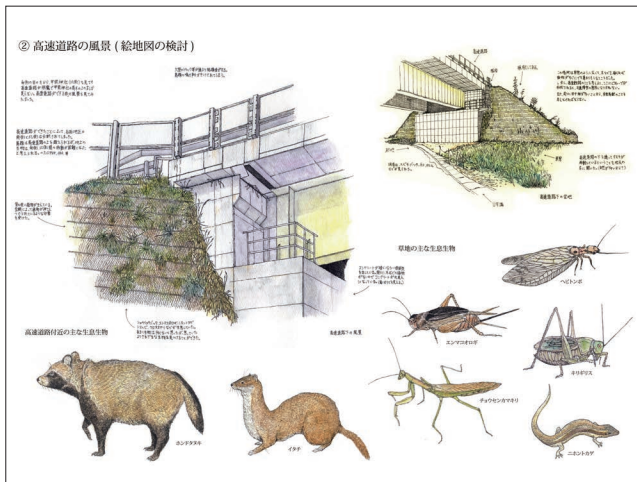


モンシロチョウの幼虫



私は、山形県山形市谷柏地区を対象地として卒業研究を行ってきた。平成9年の高速道路開通や水路のコンクリートU字溝化に伴う生物相の変化を考慮した上で、現在の生息生物を調査、改善の余地がある点は改善案を提案することにより、将来、人間が現状以上に自然に対して優位に立ち、生態系の中で人間と他の生物との繋がりが断たれることがないように、人間と自然のバランスを保つことを目的とした研究である。提案としては、谷柏地区に現在生息している生物の保全と、減少しつつある生物が増えたり、生物があまり見られなかった場所で生物が現れたりといった、生物相が豊かになるような生息空間のネットワーク、生態回廊を構想している。





- 1 甲箭神社の風景
- 2 高速道路の風景
- 3 民家前の畑の風景
- 4 卒業制作展での展示
- 5 模型
- 6 卒業制作展での風景

[講評]

木須君の作品は生活の利便性の為に引かれた道路が、環境に何を及ぼすのか、現地の調査と想像力とスケッチを通して表現されている。彼のスケッチから分かることは、そこにはどんな動物、植物がいて、どんな生態系があり、一時的に道路がどういふことを招くかである。しかし、こうした良質な観察は、本来デザイナーにとって必須条件であり、結果ではない。優れたデザイナーは観察から最善の方法を提案する。彼の場合は、道路によって分断された動物の道を作り、道路の法面を生態系にできるだけ返していく。実際の法律や効率にすべて準じてはいない部分もあるが、エコロジカルなシステムから当地区の環境を考えた上での最善の提案であったように思う。人間が便利を手に入れる前提として、このくらいの配慮はすべきであると考え。

(竹内昌義)

一般に「自然が豊か」と認識される農村（ここでは山形市谷柏）の生態環境の実態を調べ、道路建設や人々の生活と生業の変化から失われた生物多様性の回復策を立て、暮らし手の関心を引くべく視覚伝達の工夫をして表現した研究の成果である。提案は、本沢川（地区を東流）河岸と東北中央自動車道（同縦貫）道路法面の植生回復によって各戸の庭や社叢に点々と残る緑地を結ぶ、生態回廊形成を主旨とする。河川、道路の緑化については関係法令と管理実態を把握の上、河川敷の「支障木（治水上の呼称）」伐採を洪水による植生の攪乱に通じる環境変化と捉えて植物個体の入れ替わりを評価しつつ、近自然工法の応用から水際の形状を多様にし、生物種を増やそうと図るなどした。農村の環境と風景の保全・修復の必要性、およびその方法を、広く人々に知らしめる効果が期待できる研究と評価する。

(廣瀬俊介)



研究視点

近年、全国的に過疎化や高齢化などの問題で共同体としての機能が低下した『限界集落』が増加しており、私の地元大江町にもある。大江町は山形県村山地区にある人口9000人ほどの町で、山間部にかつては養蚕などを生業とした集落が数多く存在したが、現在はほとんど残っていない。現存する集落も限界集落やそれに近い状況だ。

この過疎化の問題に対し、集落住民にとってより良い対応策を考えることが重要だ。そのため、現在は住民のいない『消滅集落』の消滅に至った要因から今後の過疎への対応を考察する研究を行った。

研究内容

調査として、過疎化の要因と今後の課題や集落の現状把握、集落を去る要因や過疎による問題、土地利用の変移を明らかにすることを目的に11の消滅集落と3つの限界集落に対し現地踏査、聞き取り調査を実施した。

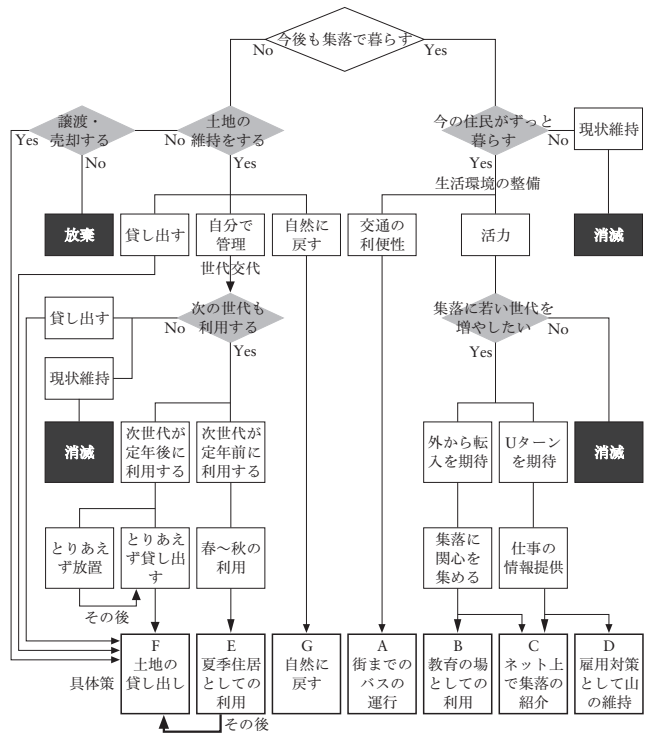
調査の結果、過疎化の要因として集落内で収益が上がらない「成り立たない生活」や、そのことから集落外に収益を求める「集落内に仕事が無い」、子供の減少による「教育の問題」などが複合的に重なり合っていることが見てきた。

問題点として、限界集落や消滅集落の人達が抱える問題は、全体的に高齢化や跡取り不足のような人的問題と、そのことから起こる現在は誰も利用していない休耕地や耕作放棄地のような土地の維持の問題がある。本研究ではまず、土地の維持の問題を今後どのように行っていくかを検討した。

検討作業をし、過疎の要因は多様であることからまずは共通の課題である『土地の維持』を設定した。土地を維持するため様々な状況をシミュレーションするフローチャートを作り、土地の維持を今後も行っていくA~Gの7つの具体策を考えた。



「限界」から「消滅」へ



シミュレーションフローチャート

このフローチャートのように皆が共通の目的を持ち、その対応を行うことがそれぞれの事情や状況にあった対応や今後の過疎集落全体における過疎への対応へと繋がる足がかりとなるのではないかと考える。

〔講評〕

日本の人口は減少に転じながら、都市化した地域に徐々に人が集まっている。そして地方の片隅では人が流出し、消滅してゆく集落が増えている。ある地域に人が住まなくなって初めて見えてくる状態や問題がある。これを鈴木君は最初に観察している。人間によって制御されていた空間が、徐々に自然に戻ろうとする。生態的には当然だが、人間が使う土地として見た場合にはその価値が歴史と共に失われてゆくことになる。鈴木君は、土地の管理に人間が関わらなくなることが地域の資産の損失と捉え、その土地を如何に将来に可能性を残しながら維持できるかということに着目した。消滅した集落の元住民を訪ね、なぜそこを離れたのかについて丁寧に話を聞き要因を探り、それを踏まえた上で現状で限界集落化している場所で何ができるかを住民や行政の話を聞きながら考えた。縮小する人口を前提とした地域経営の在り方を、方法論として模索した点が具体的で優れている。(渡部桂)





## 学科VI計画

建築・環境デザイン学科は、今年度より学科VI (visual identity) デザインを採用いたしました。これは、学科が進める教育・研究活動についての情報の視覚伝達 (visual communication) を適切に行うために、情報の要素となる文字書体とその組み方や、色彩、写真の扱い方などを検討し、規準化したものです。大学としてVIデザインを既に有しているのに対して、新たに学科としてVIデザインを開発した理由は、特徴的な教育フィールドを擁する本学のなかでも当学科が教育・研究の対象とする建築・環境デザインがとりわけ土地の自然や歴史との密接な関係を持ち、それを余すところなく表現する実験を一度行いたいと考えたことにあります。

VIデザインのコンセプトは「大地の力」と決めました。私たちの「人間、社会、自然の関係を結び直すデザイン」探求を成り立たせる根源的なものが「大地の力」であるからです。したがって、私たちの教育フィールドに在る人間の生の本質を実感させる自然、そこで生きてきた先人の足跡としての歴史、山々と田園に取り巻かれた村や町、および古くからの信仰や民俗知識が現代に息づく状況をヴィジュアルに扱うことを基本に、さらに付け加えれば、情報媒体を私たちの行為を映す鏡のように見立てることをあわせて、一貫した視覚伝達デザインを今後行って参ります。

なお、コンセプトワークからロゴタイプ形成、各種情報媒体の造本設計、VIマニュアル制作までに至るデザインは、株式会社GKグラフィックスの木村雅彦氏と秋山孝子氏に担当をいただきました。

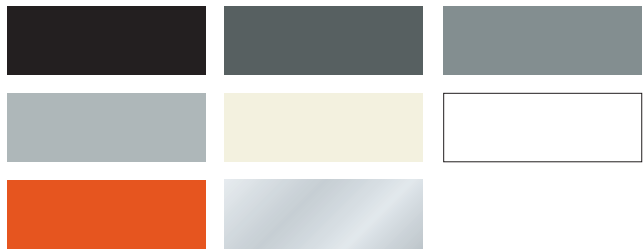
### ロゴタイプ

## 東北芸術工科大学 デザイン工学部 建築・環境デザイン学科

Tohoku University of Art and Design  
Department of Architecture and Environmental Design

### カラー

#### カラーパレット



### 和文指定書体

#### 本明朝ファミリー

あいうえおかきくけこアイウエオ  
天地玄黄宇宙洪荒日月盈昃辰宿列

#### 花蓮華ファミリー

あいうえおかきくけこアイウエオ  
天地玄黄宇宙洪荒日月盈昃辰宿列

### 欧文指定書体

#### Sabon ファミリー

ABCDEFGHIJKLMNOPQRSTUVWXYZ  
abcdefghijklmnopqrstuvwxyz 0123456789

### 写真

#### 大地の写真



東北芸術工科大学 デザイン工学部

## 建築・環境デザイン学科 年報2009

Tohoku University of Art and Design

Department of Architecture and Environmental Design, Annual 2009

発行日 2011年7月30日

編集 古川文郁 廣瀬俊介

構成 大沼亜希子

書式设计 株式会社GKグラフィックス

印刷 株式会社大風印刷

製本 株式会社大風印刷

発行 東北芸術工科大学 建築・環境デザイン学科  
990-9530 山形市上桜田 3-4-5

Tohoku University of Art and Design  
3-4-5 Kami-Sakurada, Yamagata 990-9530, Japan

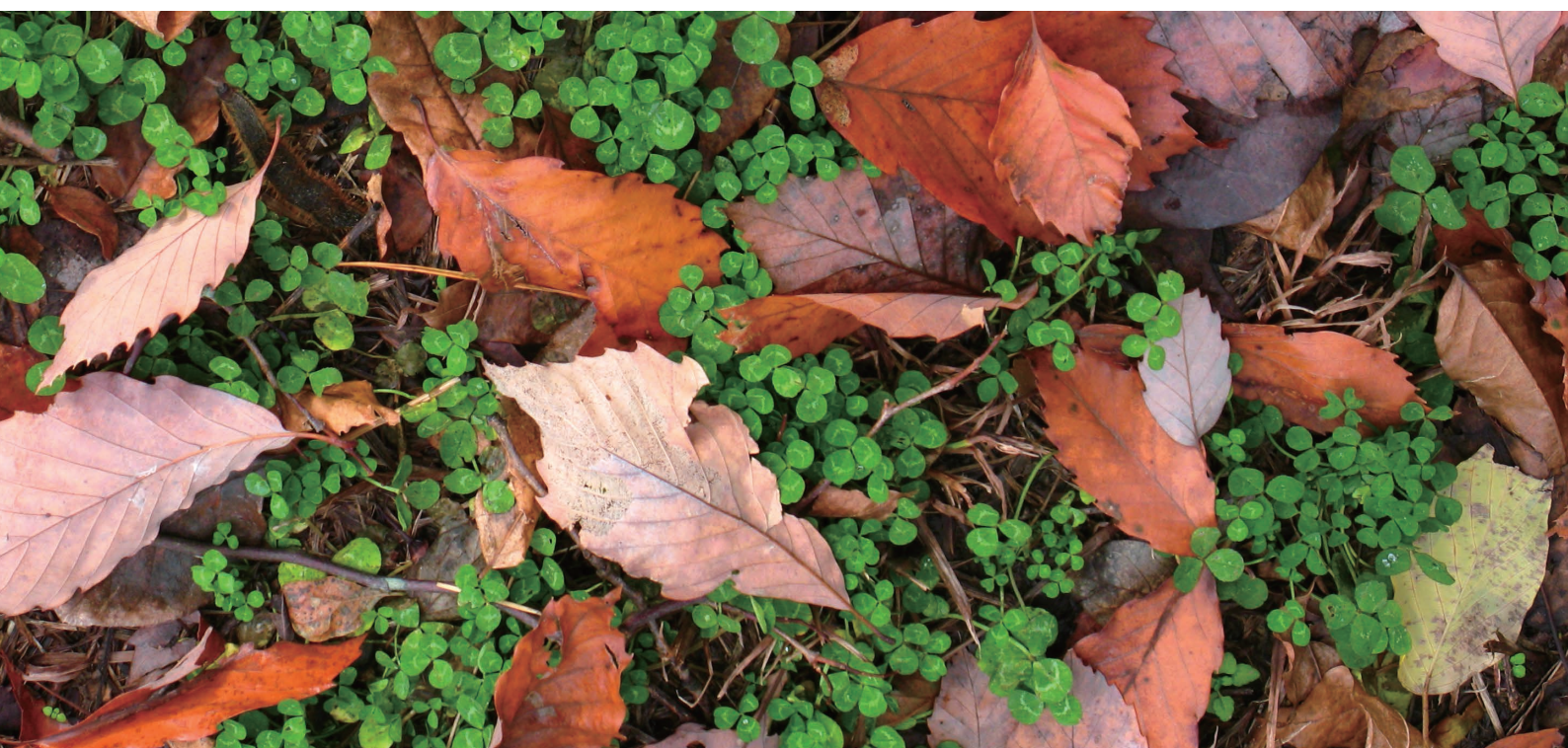
Telephone 023-627-2000

Fax 023-627-2081

URL <http://www.tuad.ac.jp/>

E-mail [nyushi@aga.tuad.ac.jp](mailto:nyushi@aga.tuad.ac.jp)





東北芸術工科大学

990-9530 山形市上桜田 3-4-5

Tohoku University of Art and Design

3-4-5 Kami-Sakurada, Yamagata 990-9530, Japan

Telephone 023-627-2000

Fax 023-627-2081

E-mail [nyushi@aga.tuad.ac.jp](mailto:nyushi@aga.tuad.ac.jp)